

私の3冊

## 混濁の時代に

社会と調査の歴史的名作品によって

松原 望

東京大学 名誉教授 / (株) ベイス総合研究所 代表取締役



### 新生「統計学」科目誕生のころ

『統計学講義』林周二著  
丸善 1963

コロナより深刻な事態がある。折から、メディアや各分野専門家にも広範囲に統計データの扱いの誤解や無知や野放図な利用あるいはフェイクさえ見られ、有効でないのみならずかえって混乱に拍車がかかり、社会の行く末も見えなくなっている。このような不適切事態はこれまでなかったことで、危険でさえある。今こそ統計学の「基礎知識」が羅針盤になるべき時代であろうか。

本書は大学の「統計学」テキストの歴史第一号であり、さすがに書名に風格がある。著者（先生というべき所敬称を略す）は新設東京大学教養学部の教養課程の「統計学」を一貫40年近く本書を以て担当した。厳密には本書には三代の履歴があり、第一代は戦後の出版事情が劣悪な折のいわゆる「ガリ版」刷である。筆者はこれで学び保存するが、内容はすでに充実し今日でも本邦で本書を超える一冊は見出しがたい。第二代の上掲丸善版で名実ともに本格的書物になったが現在は入手できず、後継第三代は東京大学出版会版で、書名も『統計と統計学』と変わるが内容骨格は変わらず、現在に至る。

当時統計学は日本では全く以てマルクス経済学の下僕扱い、論理と数理に基づいた欧米流の近代統計学などもってのほかであった。類書も参考書もなかった。大学の「統計学」講義の出現が目を見開くべき開明的であったことは言うまでもない。本書も執筆の始まりは、著者の東京大学経済学部卒業（1948年）まもなく講師着任の前後で、おそらく弱冠20歳代であろう。それだけに、後日林が後任の筆者に述懐するには、当時は林は周囲でいろいろ言われていたようだが気にせず新しい分野への激励と称賛と解していた。

かくして新生「統計学」は始まった。本書も範囲としては、分布論、統計的推論、回帰分析などはも

とより、サンプリング、実験計画、品質管理、ORなど、統計学の「教養」知識をわかりやすく解説する。今の時代データに触れる人でこれらを全く知らない人は少ないだろうし、方法の長い間の功績は歴史的に格別に意識はされないが途方もなく大きい。

だがこれら分析法以前に何よりも本書にも流れる統計学の基本精神は、一に実践的たること、二に簡明平易の常識たること、三に視野が広く深く公正たること、これが重要である。デジタル化の時代とはいうが、「データが価値を生む時代」とはこれいかに。価値とは無から生じることはない。効能書きのメリットだけに慣れ親しむ中で、こういう初心の前提は忘れられやすいものである。

### 日本政治の意味

『日本の政治』京極純一著  
東京大学出版会 1983

どのような統計分析にも読者がいる。もしそれを意識するなら、分析は文章表現力の「作品」となる。筆者はこの大きいタイトルの大著のほか、京極（以下敬称略）の著書を1冊もっており、『政治意識の分析』である。これは高知県の国政選挙の計量政治学的分析を通してみた政治意識研究で、現世代で知る人はさすがに少ないが、この分野の分析研究の嚆矢として出色である。

政治学者として、とりわけ今日よくあるように方法に熱中して対象をそれに合わせて切りそろえる「プロクラステス的」な安易に陥ることなく、あくまで実対象から離れない不断の努力と緊張を維持し、方法と対象がつねに相互にcommunicateする分析態度は今後も良き分析の範型であり続けるだろう。

政治を論じるときに、対象を承認して中へ入りきる（例：族議員の研究）あるいは承認のイデオロギー・メイキングをする（例：イエ社会論、日本社会論）、あるいは西欧思想の光でハイライトする（例：丸山政治学）などありふれているが、京極政治学は



そのどれでもない。まず対象を現場観察し写実する、それをふさわしく配置するが、その扱いが非常に繊細で価値的である。

一例で「親心の政治」(最終章)は日本式政治の美風であり、それで無数の政治的事実がうまくキモチよく説明されるが、どっこい京極の意図は、それが民主主義を巧妙に捻じ曲げた(おそらくは)似て非なるものと伝えようとしているらしい。ただしそれとなくピミヨーに。それが傷つき易い日本人の自我への温かい配慮であり、あるいは(又は同時に)およそ「意味」を理解する者には日本政治に対する痛烈な皮肉でもある。京極は「意味」の世界(kosmosと呼ぶ)を重要視した学者であった。尋ねたことはないが、京極はキリスト教徒であり、福音書にある「譬え話」のように優しく、ただし求める態度の者にだけ真の「意味」が開示される。

思い出すが、「松原君、太平洋戦争は課長が決めた戦争なんだヨ」という京極の一言の意味は今でも謎である。日本と日本人を包むこの種の謎の霧は今後ますます深い。

## Factsからみれば「意外」は消える

『ビヒモス』

F. ノイマン 著 (岡本友孝他訳)

みすず書房 1963

データも交えたナチス国家の構造分析である。

ずいぶん前だが塚本健『ナチス経済』という本があった。ナチスはゲッベルスらの反ユダヤ・イデオロギーの大衆政治宣伝で成り立っていたとの単純図式があるが、もちろんナチス国家にも「経済」はある。ナチスは異常だが、その由来にきちんと説明はつく。どのような社会も社会である以上必ずその説明要素となるいくつかの基本構造があり、それらから総体としてその「社会」のありかたが帰結される。どんな社会のありかたも基本事実のつながりからすれば、すべての社会的説明は連続的であり本質的に「意外」はなく、真に衝撃的なものはない。

本書も、体験談でもジャーナリストックでもない。ナチス国家の社会経済史の地道な実証記録で非常に味がある。いかにして、ドイツ国民がその社会経済的状况のもとで、ナチスを選択する意識が形成され、ナチス国家が生まれたか、敗戦国ドイツに対する

ヴェルサイユ条約の国家的懲罰の屈辱というよくある教科書の説明も、周辺状況扱いである。事実、敗戦からナチス政権までは15年と長い。その15年の「中味」の地道な説明が本書の特徴で、処々にある統計データも歴史事象と立体的に関わり合い、その扱い方も統計学専門の筆者には説得的で興味深い。

「ナチス」Nazisは「国家社会主義労働者党」の略称で、とにかくも「社会主義」を標榜し「労働者」の利益を守り推進するといひ、そこは意外の感もあるが、実際には表面だけでなるほど党名の示すように国家主義的で不思議はない。不況のもとでカルテル化していた産業資本は、有名な巨大化学工業トラストI・G・ファルベンのように、ナチスに接近して国策で救済され、独立自営企業は没落して労働者はブルーカラー労働者になる。生産能力だけは高まり労働者の所得も一時的に高まるが、その管理機構もナチス党組織の横滑り、経済学も単なる行政技術に過ぎない。

ナチス党組織で小学校教員出身者がとりわけ多数であったデータもある。新生「ワイマール憲法」という当時としては自由主義的憲法も、敗戦直前まで続いた権威主義的君主制(ドイツ第二帝国)のもと政治的自由の歴史的経験の浅い後発社会には、意識からしてよそよそしいものであった。マルクス主義と手を切った社会民主党(社会党に対応)も、組織的に足腰は弱く国家的規模になった企業に対しストライキを打つ力はなかった。官僚は権威主義的で、ことに司法官僚はおびただしい数の反動的判決を出した。この辺はみな統計で示されている。軍隊は比較的に政治の外に立っていたが、歴史的にも依然極めて強力であった。

こうならべると、社会の各部が多元的というよりはバラバラで中心軸を欠き、砂のようにアモルファス(無定形)で、ナチス国家ははたしてうわべだけの「国家」だったのかという疑問もわく。旧約聖書に登場する海の化け物「ビヒモス」Behemothと呼ばれるゆえんである。現代でも、どこかに似た国はありはしないか。

我々の時代にこのような社会の再到来の可能性はさしあたり小さいが、原理的には条件により絶無とは言えない点で、どのような体制へも道はついていて、「意外」はない。そこが日本にも教訓的で本当は不気味でもある。